

## [課程－２]

## 審査の結果の要旨

氏名 金子 麗奈

本研究は、症例属性と予後に関する研究が少ない胆管癌について、予後に影響する因子を、地域人口集団を対象とした神奈川県地域がん登録における大規模データを用いて明らかにすることを目的とした。難治である胆管癌の予後に経時的な改善が認められるか、また患者の属性、胆管癌の腫瘍占拠部位、手術の有無、病理組織型に注目し、サブグループごとの予後にどのような差があるかを解析し、下記の結果を得ている。

1. 著者は、神奈川県に神奈川県地域がん登録のデータ利用の申請を行い、データを取得した。
2. 初発胆管癌 14,250 例を解析対象とし、胆管癌を腫瘍占拠部位で分類したところ、肝内胆管癌の割合が 23.6%、肝外胆管癌の割合が 76.4%であった。頻度に性差は無く、診断時期では標準的化学療法認可後の 2006 年以降が 30%を占めた。手術を受けた症例は肝外胆管癌で 45.3%、肝内胆管癌で 28.6%であった。
3. 生存期間の追跡が可能であった 14,146 例で生存時間分析を行ったところ、全体としての 5 年生存率は、2005 年以前は 7.9%であったが、2006 年以降は 27.3%へ改善を認めた ( $p<0.01$ )。この傾向は、肝外胆管癌と肝内胆管癌に分類しても同様で、化学療法承認前後で変化せず、肝外胆管癌が肝内胆管癌に比して予後が良好であった ( $p<0.01$ )。コックス比例ハザードモデルにより、年齢、性別、診断時期、病理組織型、手術の有無で調整した肝内胆管癌の全死亡に対するハザード比は、1.41(1.31-1.53)であり、発見時期の差を考慮して、診断時の TNM 分類による病期を調整しても 1.46(1.28-1.67)と、肝内胆管癌が肝外胆管癌に比して予後不良であることが示された。
4. 病理組織型が得られた症例のうち、生存時間解析が可能であった 5376 例を用いた生存時間分析では、腺癌の 5 年生存率は 14.8% (2005 年以前) から 37.5%(2006 年以降)へ改善した一方、非腺癌は 19.1%(2005 年以前)から 63.9% (2006 年以降) へと腺癌を上回る改善傾向を認めた。

以上、本論文は、胆管癌に於いて、肝内胆管癌が肝外胆管癌に比して予後不良であることを、大規模データベースを用いて明らかにした。本研究は、これまで報告されたことのない症例数の胆管癌を用いた疫学研究であり、本邦での胆管癌の症例属性による予後の差の解明に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。